



# つばさ

多摩市立聖ヶ丘小学校  
 特別支援教室 つばさ  
 令和5年6月9日  
 つばさだより 第3号

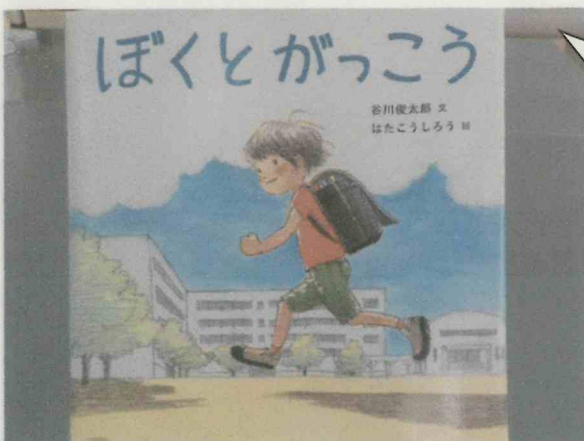
## 「テーマ・トーク」で話してみる。「共有」して深まる相手への意識。

つばさの小集団指導の中に「テーマ・トーク」というものがあります。これはいくつかのテーマを決め、そのテーマに沿って話をするものです。もちろん子供たちの中にはこうした自分の好みや感覚について話すことが得意な子もいれば、苦手な子もいます。最初のテーマはごくごく簡単なものから始めます。「好きなお菓子は?」「好きなゲームは?」いわゆる「好きな」シリーズです。そして少しずつ話をしていく中で共通点が見付かることがあります。「あ、ぼく(わたし)と一緒にだ!」「私も同じ」と、このようになると、そこに「共有」の気持ちが生まれます。「共有」の気持ちが集団に生まれることで、相手に対しての意識が出てきます。小集団の中で自分のことを話す(開示する)ことは、一定の関係性が必要です。このような相手との「共有する」という経験を重ねていくことで、相手を「知っている人=仲間」と意識することができ、集団内での関係性を深めていくことができます。こうした関係性は同時に「安心感」も生み出します。最初は発言に時間がかかったり、なかなか言葉も絞り切れなかったりすることもあります。回数を重ねていくことで表情や気持ちも交わりながら会話に発展していきます。少しずつ自分を知ってもらえたり、相手を知っていったりする中で、お互いの関係性を育てていきます。

## 「こころってなんだろう?+気持ちの言葉」

個別や小集団指導の中の基礎的な指導の中に、「気持ちの言葉」があります。「気持ちの言葉」は、自分の気持ちを表す言葉で、例えば「うれしい」「たのしい」「きもちいい」「心配」「こわい」「ムカムカ」「イライラ」等々の気持ちや感情、感覚に関係する言葉です。他にも多くの表現があると思いますが、まずはこうした言葉があること、自分の気持ちとリンクしていることを意識できるように伝えていきます。ただ、本当にこうした言葉を操って自分の気持ちとして少しずつ表出できるのは高学年からの場合が多いです。高学年に話を聞くと「低学年のときは~だった。」「今にして思えば・・・」という場面がよくあります。自分の経験と言葉をすり合わせる客観的な視点や経験を自分の中に作ることは、時間がかかるものなのだと思います。自分の気持ちを理解することは、自分と向き合うことでもあります。また、自分一人だけでは複雑に絡んだ気持ちを整理するのが難しいとする子もいます。指導では気持ちの言葉と表情カードを合わせたり、気持ちの言葉と自分のエピソードを重ね合わせたりして整理をしながら表出する指導をしています。言葉にすることで自分が分かり、相手にも自分の気持ちが伝わる。このような経験を少しずつ重ねつつ「こころって何だろう」と考えながら取り組んでいます。

### 指導にも使う絵本の紹介コーナー



ぼくがっこう 谷川俊太郎 文/はたこうしろう 絵  
 学校にいる「ぼく」が見ること感じることを通して、成長する姿が描かれています。友達のこと、学校に行きたくない日のこと、やがて卒業すること等、イラストから気持ちの変化を見つけたり、自分に重ねて考えたり、そんな学びを感じることができます。